



トムズの

‘知っとど’ コラム



VOL.225



古代の人も疫病を予防していた

2017.10.16

◆ 古代の疫病

古代の人は、清潔な身体に汚らわしいものが取り憑いた時に病（やまい）が起こると考えていました。古代人はこのけがれ（病）をまじないによって取り去ろうとしました。このまじないを担当したのが呪術師です。呪術師は禊（みそぎ）やお祓いによって病家のけがれを取り除き病根を断ち去りました。そのため呪術師は強い権力を持っていました。ある家に死者が出ると、10日余り喪に服した後、水浴びと身体を洗い清める禊を行うことでけがれをとります。人々は病をけがれであると考え、白いものにはけがれがないので白布や白砂を尊びました。また、疾病は神意によって起こるのだと解釈していました。

古来、日本の疾病は大陸からもたらされました。例えば、もがさ（痘瘡・天然痘）はインド北部で発生し、中国から朝鮮半島へと侵入し、九州に初めて上陸したのは552年です。その後、3年間猛威をふるい、朝廷にまで伝播し、朝廷の権力者のほとんどが死に絶えました（続日本記より）。天然痘ウイルスは特に処女地で猛威をふるうという習性を持っています。インカ帝国は、スペイン兵士300人余りが持ち込んだ天然痘によって、免疫のなかったインカ帝国の兵士が戦う間もなく死亡したため滅亡したと言われています。1384年から4年間ヨーロッパで大流行したペストでは2500万人が死亡しました。また、1918年から1923年に大流行したスペイン風邪は全世界で5000万人が死亡し、日本でも25万7000人が死亡しました。ひとたび疫病が大流行すると社会の秩序は破壊されてしまいます。

◆ 古代の予防法

古事記によれば流行病は疫病（えやみ）、疫の病（えのやまい）と表記され、奈良時代には麻疹（はしか）や痘瘡（天然痘）が大流行したとあります。麻疹や痘瘡の感染力は強力です。未流行地帯に侵入するやその激烈さは想像を絶するほどです。日本では621年、推古天皇の頃、疫病（はしか）が猛威をふるい622年には聖徳太子も高熱を発して死亡しました。

日本疾病史によると、6世紀頃には夏に疫病による死者が出た家では、火酒などを用いてハエや蚊を駆除して掃除をし、それ以降の疫病を免れたと書いてあります。当時はハエや蚊の駆除が疫病予防の基本だったようです。また、疫病に罹った者は人家から遠く離れた場所に送るという風習もありました。病人を隔離し、健康な人に近づけないやり方で、疫病の蔓延を防ぐようにしていたのです。

さらに、疫病を予防するために室内を燻蒸することもありました。疫病が侵入しないように麻黄・甘草・草烏頭・芍薬などの薬種や薬草を室内で燻して邪気を撤退させる方法です。当時もこのような消毒に似た概念があったようです。

奈良時代以前には薬を使って疫病を予防する方法として大黃・烏頭・桔梗などの薬種を酒に混ぜて飲み、病を防ぐ屠蘇（とそ）酒がありました。この方法が朝廷に採用され、江戸時代には京都から将軍家に屠蘇を献ずる儀式が入り、それが元旦に屠蘇を飲む風習となりました。こうして疫病を予防する習わしが一般の人々にまで浸透し、現在も続いているのです。

◆ 疫病との長い戦い

古代に疫病が流行すると人々の免疫力は一気に衰え、病気に対して無防備になりました。それでもウイルスや細菌に感染しながら生き残った人々は、免疫を獲得しました。そしてその後10～20年間はその地域の住民は疫病にかかりません。新しい世代が生まれ育ち、別の地域から疫病が侵入してくると再び大流行し、新しい世代の住民が疫病で死滅する。このような悪循環が世代ごとに繰り返されてきました。現在、日本では痘瘡（天然痘）は撲滅されましたが、地球上に人類が存在する限り、全く新しいウイルスとの戦いは今後も続いていきます。古代の人々が考えた知恵と経験に基づき、現代の人々も疫病を予防する新たな予防法を考えなければなりません。

